

作物名：大豆

病害虫名：茎疫病（病原：*Phytophthora sojae*）



幼苗期の発病



生育中期の発病



卵胞子

## 1 被害の特徴と診断のポイント

幼苗期～成熟期近くまで発生する。

幼苗期では、地上あるいは地下部の胚軸が侵され、水浸状の病斑が現れる。病斑が伸展・拡大すると、葉は衰弱、萎凋して苗立枯れ症状となる。

生育の進んだ開花後、着莢後では、根部や茎の地際、下位の分枝茎を中心に、はじめ楕円形または紡錘形の水浸状病斑が生じる。病斑が伸展・拡大すると大型病斑となり、茎の全周を覆うが、維管束は褐変しない。滞水、冠水を受けると急性萎凋症状となり枯死することもある。多湿条件では、病斑表面に白色粉状の菌糸が密生あるいは粗生する。病斑部の表皮細胞層や菌そう上には、多量の卵胞子がみられる。

## 2 伝染源及び伝染方法

発病株の卵胞子が土中で越冬し、翌年の第一次伝染源となる。卵胞子は、適温、高湿度条件下で発芽して、多量の遊走子のう、遊走子を生じる。遊走子は遊泳してダイズに付着・侵入し、感染発病する。病斑上に新しく形成された遊走子により二次感染が繰り返される。

## 3 発病・伝染好適条件

土壤水分が高い排水不良のほ場では、卵胞子は容易に発芽して多量の遊走子を生じ、感染が拡大する。したがって、長雨、湛水条件下では発病が助長される。また、土壤pHが低いと、発病が助長される。

## 4 防除方法

### (1) 耕種的防除

- ・ 連作を避ける。抵抗性品種を作付する。
- ・ 排水対策(明渠設置、サブソイラーによる地下浸透の促進等)、畦立播種を行う。
- ・ 石灰資材により土壤pHを6以上に高める。
- ・ 発病株は早期に抜き取り処分する。

### (2) 化学的防除

- ・ 種子処理剤を、播種前に塗沫処理する。
- ・ 台風や大雨等により発生が懸念される場合は、予防散布を行う。

## 5 出典

- (1) 参考文献：みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）  
農業総覧 原色病害虫防除・資材編1（農文協）  
土壤の健康診断に基づく「ダイズ茎疫病」対策マニュアル（富山県）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影

（2021年3月改訂）